

流作場 ~河口の島からにぎわいの町へ

河口の島と古信濃川の誕生

昔、信濃川と阿賀野川の河口部分の地形は何度も変化を繰り返していました。右岸の沼垂町は川の侵食から逃れるため移転を重ね、貞享元年(1684)に現在地に定住します。その後川幅は沼垂町側に大きく広がり、信濃川には多くの中洲や島ができていきました。沼垂町と対岸の新潟町は島の所有権を争いますが、元禄12年(1699)に島の支配権は新潟町のものとなります(元禄の湊訴訟、図A)。

島はその後約50年で沼垂側に寄り付くほどになり、付寄島(つけよりじま)または向島(むこうじま)と呼ばれました。沼垂町との間は幅70~140mほどの浅瀬(古信濃川)になって、信濃川の本流は島と新潟町の間に変わっていました(図B)。



図A 元禄12年(1699)4月 沼垂新設立会地図写(部分) 『新潟市史』通史編2 近世(下)から作成

安倍玄的らの「流作場新田」開発

延享3年(1746)、新潟町を統治していた長岡藩は付寄島の開発を安倍玄的(あべけんてき)ら5名に命じます。沼垂町は付寄島の一部所有権を主張しますが(延享の島争い)、受け入れられることはありませんでした。

寛延3年(1750)、4年の開発期間を経て新田村が誕生します。ここが「流作場新田」で、開発の中心となった安倍玄的の名前をとって「玄的」とも呼ばれました。

天保14年(1843)の新潟上知によって、新潟町は幕府領となります。弘化元年(1844)には流作場新田と寄居村も上知され、幕府領となりました。



図B 延享4年(1747)沼垂新設立会地図写(部分) 『新潟市史』通史編2 近世(下)から作成、一部変更

新潟町と沼垂町をつなぐ

信濃川を挟んで位置する新潟町と沼垂町の行き来は渡し舟によるものでしたが、明治19年(1886)に萬代橋が開通、同時に萬代橋から沼垂町をつなぐ県道「万代町通」も造成され行き来の方法が大きく変化します。明治30年(1897)沼垂駅、37年(1904)に新潟駅が流作場に開業し、万代町通はにぎわいを増して流作場新田は新潟町と沼垂町をつなぐ町としての機能を大きくしていきます。

明治以降、流作場新田は中蒲原郡の1村となりますが、明治22年(1889)に沼垂町と合併、大正3年(1914)には新潟市と沼垂町の合併によって新潟市に統合され、今に至ります。

全国とつなぐ

昭和29年(1954)、新潟駅の移転のために現在新潟駅がある場所の土地区画整理事業が着工され、駅前道路・東大通とこれに直交する明石通が整備されていきます。駅は昭和33年(1958)に移転し、流作場はバスや鉄道といった交通の拠点となり、さらに昭和40年代後半には「万代シティ」という商業エリアに変貌を遂げます。

昭和50年代には流作場という住所は姿を消しますが、大正、昭和、平成という時代の流れの中で、新潟市の拠点機能を果たす要の地区として、さらに変化と発展を続けています。



- 古信濃川跡をたどるコース
- 萬代橋~流作場五差路~三社神社~本立寺~天明町~万代町通
- 流作場五差路~旧新潟駅前通~弁天公園~春日町~新潟駅
- 初代・二代目の萬代橋の架かっていた位置
- 信濃川と古信濃川に囲まれた流作場のおおよそのエリア
- 明治初年の沼垂町のおおよそのエリア
- 地図上の水面(薄い水色部)の掘や川岸の跡は大正8(1921)年発行「新潟市全図」を参考にした、おおよその位置です。
- 沼垂の町・小路めぐり案内板の位置と、小路めぐりコース



つなぐ町流作場あるき (古信濃川跡めぐり)

参考文献
『新潟歴史双書3 新潟歴史物語』、『新潟歴史双書8 新潟の地名と歴史』、『新潟歴史双書9 萬代橋と新潟』(以上、新潟市発行)
※記載した内容には、歴史的には定説とすることが難しいものも含まれており、いろいろ説があるかと思えます。また、漏れ等もあるかと思いますが、みなさまがまちづくりを考える際に役立てていただければ幸いです。

取巻の際には、近隣の方や通行する方のご迷惑にならないよう、節度ある行動をお願いいたします。

〈見方・使い方〉
折りたたんでページをめくるように見てください。
裏も同じように真ん中で折り返し、たたんでください。

- イラスト・写真・構成:野内隆裕
- デザイン・本文テキスト:上田浩子
- 協力:新潟市歴史博物館みなとびあ
- 製作協力:roji-ren niigata

